

木曾生物學研究所創設趣意書

【代 瞻 寫】

木曾生物學研究所創設趣意書

一、生物學界輓近の趨勢

顯微鏡の發達と進化論の出現とに促されて前世紀の後半に長足の進歩を遂げた動物學は、分類解剖組織發生等所謂形態學的方面に著るしい知見の増大を見たる外に、漸次その研究範圍を生理生態等の方面に擴張することになり、活きたる動物に就て生命の活躍を探求する時代に入り來りました。その内にも歐米諸國に於ける生態學近時の發展には、實に目ざましいものがありまして、初中等教育に於ける博物學教授の方法にさへ一大變革を來しつゝあるのであります。

抑も此生態學と申す部門は、各種の動植物が地球上の異なる生活條件、即ち氣候風土に對し若しくは生物相互間に、如何なる關聯を保ちて生活しつゝあるかの考察を主題とする學問でありまして、或は個々の種屬についてその發育蕃殖の模様、攻守攝食の行動を研究し、或は原野森林湖沼海洋等に臨んだ適當なる地區を選んで、

そこに棲息する動植物の群落を調査し、或は更にそれ等の生物を実験室内に運び來つて、一層精細なる分析的研究を行ふことを目的とするものであります。従つて現代生物學者の活動舞臺は、往昔紙片に貼布した暗葉や藥液に浸した標品の査閱を主なる職務とした時代と異り、都市内の教室ではなくて、野外であり水邊であり、若しくは高山、外洋の上でなければなりません。

元來生物學の研究や教授には、大學の講堂以外に尙幾多の施設を必要とするものであります。現今世界文明國の大學では學生に生物の自然的棲息の狀況を觀察せしめ、研究生に各種の問題を調査せしむるために、動植物園若しくは生物實驗所を設置して居ります。我邦の官立大學に就て見ましても、東京、京都及び北海道各帝大の有つ植物園、東京(日光)東北(八甲田山)及び北海道(大雪山)各帝大が所有し又は將に創立せんとしつゝある高山植物園、或は東京(三崎)京都(紀伊瀨戸)東北(淺蟲)九州(天草富岡)北海道(忍路)各帝大の臨海實驗所、若しくは京都帝大(大津)の臨湖實驗所等皆此の目的に使用せられて居ります。夫等は恰も醫科の大學に附屬する病

院が研究にも授業にも缺く可からざる如く、動植物學關係の教室に於ては最必要有益なる設備なのであります。

二、森林及び溪流の生物學研究所の必要

然るに茲に外國に於ては既に盛に開始せられてゐながら我邦で未だ一向着手せられてゐない生態學的研究の領域があります。それは森林並に溪流の生物界であります。従來一部の登山家によつて注目せられた高山動植物の生態や、林學者によつて觀察せられた低地人工林の狀況等の報告もありませんが、孰れも眞に森林動植物の純科學的研究と稱するに足るものではありません。況して溪流中の生物に到つては、今日迄一向研究せられて居ないと評してよろしく、中央に於ける生物學者の知見が却つて地方漁民の經驗に及ばざること遠き有様であります。尤も京都帝國大學の天津臨湖實驗所では夙に淡水水域の調査を續行しつゝある關係上、啻に湖沼池溝ばかりでなく、河流にも瀑壺や濕地にも常に相當の注意を拂つて採集を爲し

つゝありますので、今日迄に幾分我邦溪流動植物の屬種を蒐集して居り、目下調査の成るに従つて順次之を記載報告しつゝあるのでありますが、未だ直接溪流に臨みたる地點に永く滞在し得るやうな足溜りを得ないために、大津若しくは京都の研究室まで持ち歸りたる保存標品に就て、主として分類形態方面の査定を試み得るに過ぎないのは、吾々が常に遺憾としつゝある所であります。夫故吾々我邦動植物の生態學的研究に没頭する者共にあつては、一日も早く好適なる地點を撰んで森林及び溪流の研究室を創始し、相當期間そこに腰を落ちつけて觀測飼育若しくは實驗を實施し得る日の來らんことを切望して止まないのであります。私は前節に於て臨海臨湖實驗所又は植物園を以て醫科の大學に附屬する病院の如きものだご申しましたが是等のものが備はつてゐても尙森林溪流の研究所が缺けて居る間は、恰も病院に内外科婦人科等があつて未だ眼科耳鼻咽喉科や皮膚科が缺けて居る場合に比較してもよろしいと思ひます。

三、森林及び溪流研究の應用的効果

以上は單に純學術的方面からの森林及び溪流生物學研究所の必要を述べたのでありますが、かゝる研究所の効果はまた産業助成の應用的方面から考へても、大に緊要なるものであります。此事は米國シラキユース森林大學に附屬するルーズベルト野外生物實驗所、同じく米國の國立フェアポート臨河實驗所（ミシシッピ河）若しくは露國のサラトフ臨河實驗所（ボルガ河）等の舉げつゝある成績に鑑みても甚だ有望であることが分ります。

世人動もすれば科學の應用方面を研究するに、最初より應用を目的として試験するのが捷徑と考へ、基礎的、純理學的なる研究を迂遠なるものゝ如くに評することがあります。之は大なる誤でありまして、眞に有益なる科學の應用は精確なる根本的研究の遂行によつて始めて達成せらるゝものであります。今一例を以て之を説明しますならば、近時我邦化學工業及び水力發電工業の普及するに伴ひ、河水の利

用が各地に於て企てられるやうになり、地方農民の産業上にその利害を及ぼすこと年々激甚となりつゝあります。就中工場排出液の放流、堰堤の築造によつて起る漁業の悪影響といふことは、近年到る處で喧しき問題であります。さてかゝる問題を政争の具に供する地方政黨員の常套手段に對して、彼等の操縦や買収によつて一時を糊塗するごいふやうなやり方は固より論外であります。現在それで充分なりと認められて普通に行はれつゝある解決方法、即ち官民の調停によつて會社が若干の賠償金を出すとか魚道魚梯を架するとかいふ風な手段も、忌憚なく評しますればただ何等救済方法と認むべきものではありません。何となれば會社側の出す償金そのものが直接魚族蕃殖の有効手段に充用せらるゝ場合が甚だ稀であり、又今日の魚道魚梯なるものは昔時未だ魚族の生態、習性、心理等の智識が極幼稚であつた時代に考案せられたもので、今日の動物生態學上の立場より看れば、實に不完全極まるものであるからであります。若し眞に溪流魚族の蕃殖を計り、河川工業のために與へらるゝ障碍を除かんと思ふならば、須らく吾々が有つ最新の智識を基として、今一

層精細なる調査並に實驗を行ひ、その結果から歸納立案せらる可きものであります。單に溪流ばかりでなく、山岳や森林の動植物に關聯して、吾々が速に研究に着手しなければならぬ産業關係の重要問題が澤山ありまして、例へば樹木伐採による氣候又は水理の變化、高地と低地に於ける生物界の差違、害益蟲の増減、鳥獸蕃殖等、皆科學と實際との双方に跨つて純學術的研究を要する緊急事項なのであります。而して是等は、諸官省府縣の技術官や會社關係者などの如く、公私當面の問題に忙殺せられたり、地方の政情に制肘せらるゝ人々では、到底充分にやり通すこの出來ないもので、ごうしても政治問題の外に超然として純學術的の立場より忌憚なき意見を發表し正しき結論を下し得る學者の側に於て遂行せられねばならない研究であります。

京都帝國大學が大正三年大津市に臨湖實驗所を創設しまして以來、同所の事業として琵琶湖は勿論日本全國各地の湖沼の淡水生物を調査研究し、逐次學術的報告を出版し、淡水生物學に關する夏季講習會を開催すること四回、又屢々上下水道其

他應用方面に向つて貢獻する處がありました。更に京都帝國大學は大正十年以降動物學教室を理學部内に新設しまして専門學術の研究と學者の養成とに努めつゝあります。其間特に力を生態學の方面に注ぎ來つたのは世間周知のことであります。私の口から申すのは烏滸がましくありますが、此の臨湖實驗所と動物生態學の講座とは日本官公立大學中唯京都のみが之を有つものであります。従つて京大關係の私達が更に進んで森林及び溪流の生物研究所を加設し、以て研究並に授業上の完全を期し度いといふ望蜀の念を起すのは當然の事と了解せられるでありませう。

四、候補地としての木曾地方

今假りにいづれかの方面から所要の資金を得まして、森林及び溪流生物の實驗所を新設するものとしたらば、その位置を果して如何なる土地に定む可きかといふと、私は之に考慮す可き二つの條件があると思ひます、第一は、かゝる研究所はたとへ管理上の便宜からは或は一つの大學に隸屬せしむるにしても、實際に於てはなるべ

く全国各地の學者が之を利用し得るやうに、本邦の中央に近く然かも交通の便の宜しき所に定むるのが得策だと考へます。第二には、附近に廣汎な森林が擴がり大小種々の溪流が走れる所、然かも此等の森林や溪流が比較的人力による攪亂を受けずして、よく昔からの自然的状態を保存して居ることを大切なる條件と致します。そこで私は此二つの條件を具備する候補地を物色致しまして數回踏査の結果長野縣木曾地方の好適なることを發見しました。人の知る如く、木曾には、御嶽、駒ヶ岳の如く整齊なる植物分布を有つ高山があり、千古斧鉞を入れざる原始林が各所に保存せられ、又新舊各種の地層の上を流るゝ大小溪流の數が實に夥しいのであります。而して茲に生育する動植物の種族の豊富なること及びその生態の多種多様なることは私共が最近數年來の豫察調査によつて確かめ得た事實であります。更に追加して數ふ可き一つの好條件は一般長野縣民の博物學研究に對する好感であります。此縣の中小學教員が郷土自然界の調査に熱心なることは、到底他縣にその比を見出し得ない所でありますから、若し此の地方に前述のやうな學術的研究を開始するなら

ば、地方の有志翕然として來援するであらう事、世間既に定評のあるところであり
ます。

畏多くも 今上陛下には自然科學特に博物學の研究に深き御興味を有たせ給ひ、
宮城内に生物學研究所を設らへ遊ばされてある外、各地行幸の砌、その地方の動植
物に關しいご御熱心に専門的御調査を御親らし給ふ由承つて居ります。今帝室に關
係ある木曾地方に我邦最初の森林及溪流生物學研究所が作られて、御料林内又は附
近の動植物に就て有益なる研究の報告が續刊せられ、又その智識の産業上に於ける
應用効果が顯はるゝに到つたならば、如何ばかり 聖慮を喜ばし奉るであらうかは、
茲に改めて申す迄も無いところであります。

五、木曾生物學研究所の設備

森林及び溪流生物學研究所の施設として必要な建物及び内部設備に關しては、
今その詳細を述べませんが、最も必要なものゝ二三を挙げますなら、(一)精密な

る觀察調査を行ふために、或地域を區劃して濫りに他人をして立入らしむること無きやうにし氣象觀測をはじめ各種機械器具を据つけ、能ふ限り精細なる實驗を此區域内に於て行ふこと、(二)更に一層微妙なる研究をなすため實驗室内に溪流を引き、又は建物の附近に森林、園圃を設けて、栽培飼養を續くること、(三)廣く參考圖書標本を蒐め、又各種の機械器具を備ふること、(四)常住者又は滞在研究者のための宿泊設備を作ること、(五)研究の結果を出版報告すること、(六)更に調査實驗の結果を分り易く公示し、内外國に於ける斯學研究の狀況を一般民衆に紹介する博物館を加設することも甚だ有益であります。最後のものに對しては彼瑞西や獨逸などで山岳博物館や林産物博物館が登山や林業の中心地に近き小都會に建てられ旅人、參觀者をして容易に登山の實況又は森林經營の一般を會得せしめるやうになつてゐるのを善き手本と致すべきであります。

昭和三年一月

京都帝國大學教授 川村多實 一稿